

空のもとで生きる
- 新しい都市のかたち -

21819027 月ヶ瀬 かれん
指導教員 宮 晶子 准教授

高層化都市 空 山
空間 かたち 背景

1 背景と目的

私の東京に対するイメージは狭苦しく、息詰まるものである。私の実家は愛知県にあり、家の前には田んぼと壮大な空が広がる。一方で、祖父の家が東京にあるため、幼い頃から東京に遊びに来ていた。幼い頃に東京から愛知へと帰る首都高速道路で、過ぎ去っていく東京の高層ビル群を見て安心したことを覚えている。大学生になり東京で建築を学び始めると、私は外観的な形に興味があることを認識した。かたちを重要視してきた四年間の設計課題の集大成として、自分の興味を理解し、他人と共有できる形にしたいと考えたことが本設計の発端である。機能性や合理性が優先された高層ビルが建ち並ぶ東京で生きる人々は、頭上に広がる大きな空さえも忘れて生きている。今も東京では、背の高いビルが高さを競うように次々と建てられ、都市に対するイメージが覆されることは難しい。高層ビルという現代の都市イメージを作り上げている構造を再考察し、新しい都市のかたちを提案することで、現代の都市に生きる私たちに、本来の人間らしい生き方を認識させ、広い空のもとで生きていることを思い出させることを本設計の目的とする。

2 高層化都市

今の時代、都市と聞いて想像するのは東京などに見られる高層ビルが建ち並ぶ光景である。所狭しに高層ビルが建ち、私たちは区切られた空間の中で生きている。そんな誰もが共通でもつ窮屈で圧迫感のあるような都市を作り出す高層ビルは、今後もさらに高層化され、増え続けるだろう。

3 空

田路貴浩氏は、「風景庭園では視界を限るとそこには風景の焦点とはなりにくい樹木と大地あるいは大空しか残らない。」¹⁾と述べる。今、都市で目に映る光景は、高層ビル、人、車などである。しかし元来、地球は大地と空から成るもので、人間も高層ビルもすべて地球から生まれたものである。忙しく現代を生きる私たちが忘れてしまった空を、壮大な空という空間に生きていることを再認識させるべく、空について考察する。

3-1 空と空間

私たちは空のもとに広がる大きな空間の中で生きている。山はその空間をゆがませるものではあるが、空間を区切るものではない。木の虚、木陰にも空間は存在する

が、その空間は区切られたものではなく、大地から空まで連続した大きな一つの空間である。ゴットフリート・ゼムパー氏は「建築にとっての最初の衝動は空間を囲むことにある。」²⁾と言う。空間を囲むことで建築が生まれる。つまり、人工物である建築物だけが壮大な空までの一つの空間を区切り、分割しているといえる。建物は大地に広がる大きな空間を、建物内の空間と、建物の外にあるもう一つの空間に分けるのである。今の都市は、高層ビルが建ち並び、空間をさらに複数に区切る。小さく分割された箱の中に暮らす人々は都市ならではの窮屈さや、圧迫感を感じている。

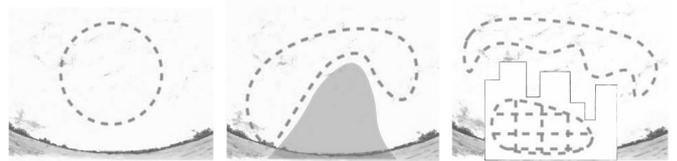


図3-1 空間の構成

3-2 空の位置

スピロ・コストフ氏は、「スカイラインとは地上と空が出会う線である。地平線に建つ建物によって形づくられるスカイラインとして使われ始めたのは1876年以降。」³⁾と述べる。スカイラインより上が空であり、下が私たちの暮らす大地である。つまり都市で見るスカイラインは、都市の高層ビルによって形成されるため、建物に左右される。よって高層ビル群が人間の生きる世界と空を分断しているといえる。今は昔より建物が高くなっており、スカイラインの位置も上昇している。これは地面からの空の位置が高くなるということであり、高層ビルが増え続ける今、人々と空の距離はさらに離れているといえる。東京の銀座や丸の内では同じような高さの建物が並び、



図3-2 空までの高さを作る高層ビル群

より顕著に空までの高さを感じる。空が見える状態でありながら、空が遠く感じる原因は、分厚い雲が覆っているかのような面を高層ビルが作り出していることにあるのではないかと

3-3 背景の役割

光井渉氏、太記祐一氏は、「起伏の激しい日本では、伽藍の背景に必ず山並みが見えるので、周囲から完全に遮断された状態を作り出すことは不可能であるために、法隆寺西院は、自然地形や背景とのバランスを重視して作られた。」⁴⁾ という。以上から日本人は古くから建築を建築だけとして捉えず、周囲に広がる風景をも取り込んで建築を作っていたことがわかる。一番奥の背景として、空が広がり、その空の前に第二の背景として山々が存在する。そして、その手前の一番身近なところに人工物である建築物が建てられる。今の日本では、建築物が建ち並び、背景として映るのは空だけである。まして都市の中心では高層ビルが建ち並ぶため、空をも風景の一部として見るのが難しい。今の都市に建つ建物は、本来の最大背景である空、第二の背景である山を忘れ、既存の高層ビル群のみを背景として立ち上がっているのではないだろうか。昔のように風景として建築物を眺めることができなくなってきたといえる。

4 山

東京では、山を見ることは少ないが、赤坂や乃木坂など坂のつく地名が複数存在し、坂が多い場所であると感じる。そこで正井泰夫氏、内藤昌氏、穂積和夫氏の文書を参照すると、皇居周辺の坂は、徳川家康が江戸城を築くために生まれたことがわかる。彼は第一に大規模な治水事業を行った。第二に今の駿河台やお茶の水にあたる神田山を切り崩し、その土で日比谷の入り江を埋め立てて、平坦な今の丸の内にあたる土地に武家屋敷を並べた。こうした都市の発展にともない、大地と低地の崖や斜面に坂が作られるようになった。以上により、東京には山はあまり見られないが、坂は数多くあることがわかる。つまり、東京の大地そのものが山になっていると捉えることができる。都市である東京には、山がないということではなく、山の表面にも人が住み着き、山が坂道として認識されているのである。つまり、山を臨むことは東京では難しいかもしれないが、東京を構成する大地自体は、隆起的な山そのものであり、東京に生きる人々は山の上に生きているということに着目する。

5 設計提案

5-1 趣旨

今の都市は、機能性と効率性を求めた結果のかたちであり、本来の人間らしい生き方と離れたものである。合理的に生きる現代の人間に、壮大な空のもとで生きていることを再認識させる都市に変化させることで、今の都市の生活の息苦しさから解放する。新しい都市のかたちを提案する。大きな人工物である建築の生み出す空間に着目しながら、空間を区切るだけではない新しい建築の可能性を探る。

5-2 敷地

現代の日本の大都市である東京の丸の内を敷地とする。オフィス街である丸の内には、多くの高層ビルが存在する。また東京駅八重洲口側では、新たな高層ビルが建てられる計画がある。一方で、丸の内に建つ高層ビルは高度経済成長期に建てられたものが多いため、建て替えが多く行われている。その一つに前川國男設計の東京海上日動のビルがある。この建物が建つ当時、高さ規定があった。しかし、東京海上日動が計画された時、技術発展などを理由に規制が撤廃されたため、東京海上日動では100メートル超えのビルが計画された。だが、この敷地は皇居と隣接するため、皇居を見下げるといふ懸念がなされ、美観論争を巻き起こした。結局、美観には根拠がなかったため、高さを低くして建てられ、丸の内ですべての高層ビルとなる。これ以降、たくさんの高層ビルが建てられていく。今、当時目立っていた東京海上日動は他の高層ビルに埋もれている。丸の内の高層ビルによるオフィス街形成の発端となった、東京海上日動の取り壊しが決定した今、新しい丸の内のかたちを再検討するにいい機会といえる。

5-3 提案

丸の内に大きな高層ビルほどの高さの山を建てる。四角で形づくられる高層ビルは敷地いっぱいに建ち、そのままの面積をもって上へと伸び、エレベーターなどの機械的な垂直方向の動きによって高層階へと移動する。その結果、地を歩く人から空を断絶させる。一方で山の建築は、地面と空が滑らかにつながり、空間を区切ることなく山を登るように空間へ向かう。それにより一階、二階という高さの概念がなくなり、人間の世界と空の世界を一体化する。また丸の内は地下空間が豊富であり、人の空間は地下に追いやられていると捉えられる。追いやられた人の空間を地下から地上へと持ち上げ山を形成する。山のような建築を建てることで地球の形を現代の人間に見合うかたちへと変える。高層ビルが山の建築によって覆われ、そしてそれらが朽ちて自然に帰るとき、丸の内は山の都市へと生まれ変わることを提案する。

引用文献

- (1) 田路貴浩『イギリス風景庭園 - 水と緑と空の造形 -』（監修：香山壽夫）丸善（2000/9/1）
- (2) 大倉三郎『ゴットフリート・ゼムパーの建築論的研究』中央論美術出版（1992/3/1）
- (3) スピロ・コストフ『都市の歴史』東洋書林（2021/10/1）
- (4) 光井渉・太記祐一『建築と都市の歴史』井上書院（2013/10/25）

参考文献

- ・高層ビルと都市生息地評議会（CTBUH）
超高層ビルセンター（skyscrapercenter.com）（2021/11/26）
- ・正井泰夫『東京・地理の謎』双葉社（2003/2/1）
- ・内藤昌・穂積和夫『江戸の町（上）』草思社（2010/9/23）